

# 児童生徒の視点を生かした授業の工夫改善

## -児童生徒による授業評価の在り方について-

指導主事 江 藤 芳 彰  
Eto Yoshiaki

### 要 旨

児童生徒の視点を生かした授業の工夫改善には、実際に授業を受けている児童生徒による授業評価が不可欠である。本稿では、児童生徒による授業評価を取り入れた、PDCAサイクルを用いた授業の工夫改善について、先進県の取組などを参考に考察をした。児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせるには、学校、学年及び教科としての組織力を高め、PDCAサイクルに全教員で取り組むことが大切である。

キーワード： 授業の工夫改善、児童生徒による授業評価、PDCAサイクル

## 1 はじめに

奈良県教育委員会では、平成14年1月に「奈良県の教育改革に関する『県民5,000人アンケート』調査」を実施した。この中で、「授業をさらに改善し、指導力を高めるために、授業に関する子どもの意見を教員が取り入れる仕組みを作ることについて、あなたはどのように思いますか」という質問があった。その結果は「賛成」が43.2%、「どちらかといえば賛成」が38.8%であり、賛成の意見は合わせて82.0%であった。県民の大多数が、何らかの方法で、子どもの意見を教員が取り入れることに賛成をしている。現在、各学校で教員が目標に準拠した評価の下に、指導と評価の一体化を図り、授業の工夫改善を行っている。しかし、実際に授業を受ける児童生徒の視点を生かして授業の工夫改善を図る取組は、県内ではあまり行われていない。授業の工夫改善を行うためには、教員が児童生徒を評価すると共に、授業を受ける児童生徒による授業評価が必要であると考えられる。

## 2 研究目的

児童生徒の視点を生かした授業の工夫改善を行うために、児童生徒による授業評価の在り方について考察する。

## 3 研究方法

先進県における生徒による授業評価の取組や大学のファカリティ・ディベロップメント (Faculty Development : 大学教員の能力開発) の取組などを参考に、児童生徒による授業評価を基にして、その視点を生かした授業の工夫改善の在り方について考察する。

## 4 研究内容

### (1) 授業評価のねらい

児童生徒には、基礎的・基本的な知識や技能はもちろん、これに加えて、学ぶ意欲や思考力・

判断力・表現力なども含めた「確かな学力」を育てることが求められている。「確かな学力」を育てるためには、指導と評価の一体化を行い、授業での指導の質を高めることが重要である。それとともに、教員が「わかる授業」を行っているかについて、児童生徒が授業評価を行い、それを踏まえて、授業の工夫改善を行うことも必要である。すなわち、児童生徒の視点を生かした授業の工夫改善である。

## (2) 授業評価の現状

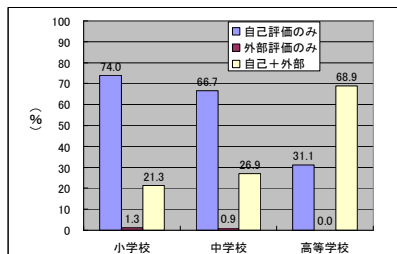


図1 学校評価の評価者

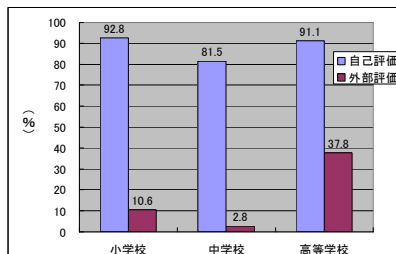


図2 授業研究などの評価

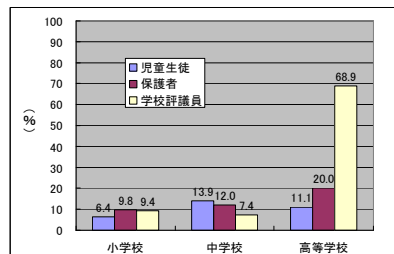


図3 外部評価の評価者

国、県において授業評価にかかわる調査は実施していないが、奈良県内の公立学校を対象とした平成15年度における「学校評価及び情報提供の実施状況調査」（学校教育課調べ）から授業評価の現状が分かる。この調査によると、小・中学校では自己評価を、高等学校では自己評価と外部評価をともに実施している学校が多い（図1）。また、授業研究などの学習にかかわる評価では、多くの学校が自己評価を実施しているが、小・中学校では外部評価が少ない（図2）。外部評価の評価者については、小・中・高等学校ともに児童生徒が評価者となっている学校は少ない。このことから、授業評価についても、児童生徒が積極的にかかわっている例は少ないものと考えられる（図3）。

学校評価の評価項目の一つとして学習指導があるが、それは学校全体としての学習指導の評価であり、各教員、学年や教科としての学習指導の評価ではない。児童生徒の視点を生かした授業の工夫改善を行う場合、各教員として、更に、小学校ならば学年組織として、中・高等学校であるならば教科としていかに授業の工夫改善を行うかが大切である。したがって、学校評価とは一線を画して、児童生徒による授業評価を行う必要がある。

## (3) 授業評価の流れ

### ア PDCAサイクル

PDCAとは、民間企業で培われたマネジメントの手法である。Plan、Do、Check、Actionの頭文字で、これら四つのステップを一つのプロセスとしてと

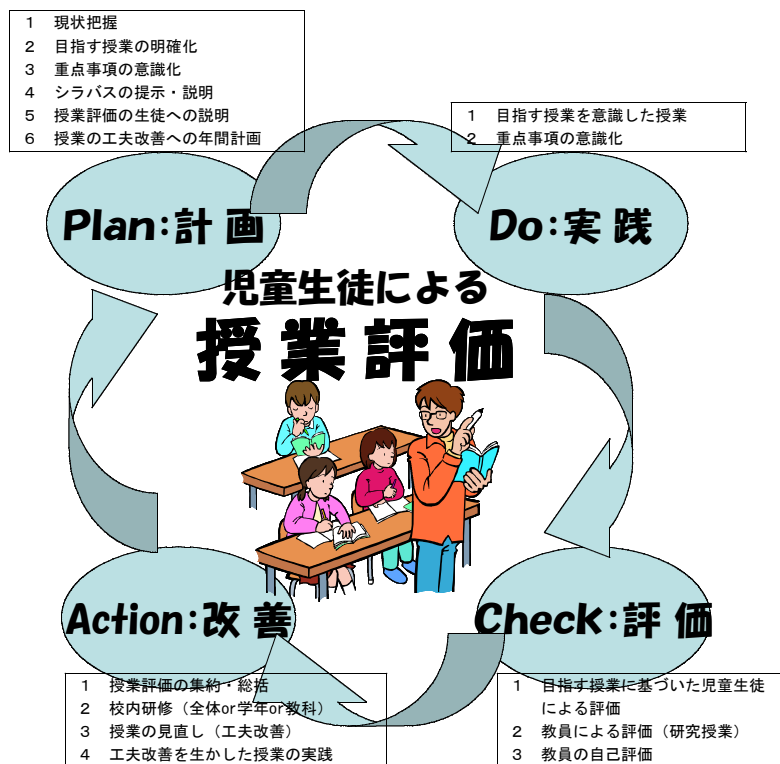


図4 授業評価におけるPDCAサイクル

らえて事業を行うことにより、継続的な改善を図るというものである。授業評価にかかわっては、目指す授業に基づいた計画（P）を立て、授業実践（D）の後に、必ず評価（C）を行い、評価に基づいた授業の工夫改善（A）を行う。この工夫改善へのプロセスでは、授業の工夫改善にかかわる仮説が設定され、PDCAサイクルの2巡目からはその検証がなされる。

## (ア) Plan：計画

### a 計画の立案

計画を立てるには、自らの授業について現状把握をすることが重要である。客観的に自らの授業を振り返るために、児童生徒からアンケートをとることも考えられる。現状把握ができれば、次に目標を立てる。その際、目指す授業像を明確にし、PDCAサイクルが継続的に実施され、マンネリズム化を起こさないために、重点目標を置くことが必要である。

児童生徒に授業評価を計画的に行わせるために、授業の初回にシラバスを児童生徒に提示し、自ら行う授業や授業評価についての説明を行う。授業評価の説明では、教員の授業を評価するとともに児童生徒自らの学習を振り返る機会であることを示す。また、PDCAサイクルを計画的に実施するために、授業評価の年間計画を立てるといったことが重要である。

### b シラバスの作成

シラバス作成の目的は、①児童生徒の主体的な学習、②授業の工夫改善、③地域・生徒・保護者への説明責任などである。学習の目標と内容、指導方法、評価規準、評価方法、教科書、参考図書、学習ルール、授業方針などを示す。機械的に作成するのではなく、児童生徒の実態をよく踏まえ、特色あるものをつくらなければならない。例えば、都市部にある中学校では、理科の特色として、自然体験を重視するといったようにである。シラバス作成時に、大単元を単位としてしまうと、内容の粗いものになってしまう。実習を伴う教科では、単元で行う実習を示すと分かりやすくなる。そのほか、各単元や題材における問題集や資料集の参照ページ、夏期休業中の課題、参考図書、参考Webページなどを示

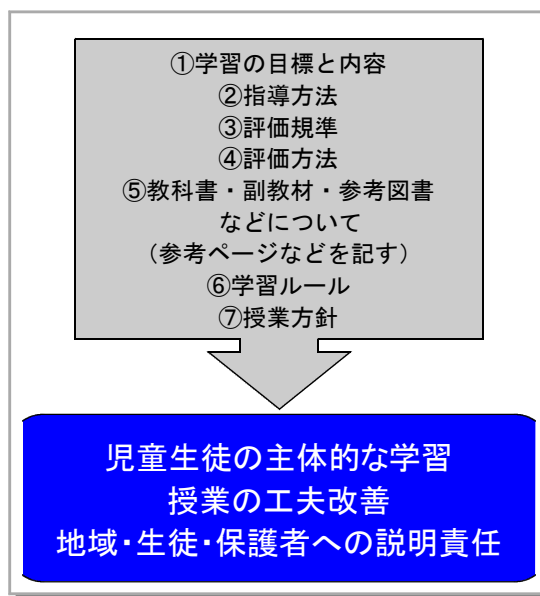


図5 シラバスの内容

すと児童生徒の自主的な学習が図れる。また、学習の目標や内容は具体的に示し、児童生徒や保護者が分かりやすいような表記を心がけることが大切である。シラバスは配布して終わりではなく、授業で活用することが求められる。

年間計画では、児童生徒による授業評価を行う時期を決めておく。年度内に重点目標を達成するためには、少なくともPDCAサイクルを2回繰り返す必要がある。そのためには、1学期末と2学期末の2回で授業評価を行い、休業中に工夫改善の方針を立てることが望ましい。

### c 授業評価票の作成

評価項目の策定は、学校、学年、教科及び個人で行う。小学校や教科の人数が少ない中学校では、学校と学年で策定する。学年や教科では、基本となる評価項目を策定する。教科には教科独自の評価項目がある。例えば、理科では「観察・実験を学習内容にそって適切に行っていた」、

表 1 評価項目例（中・高等学校）

<p><b>シラバスについて</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスには、学習目標がはっきりと示されていた。</li> <li>・シラバスには、評価方法がはっきりと示されていた。</li> <li>・シラバスは、学習に役立った。</li> </ul> <p><b>授業の内容について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容の難しさは、ちょうどよかった。</li> <li>・授業内容に興味や関心がもてた。</li> <li>・授業はおもしろかった。</li> <li>・授業の内容は役に立つと思う。</li> </ul> <p><b>授業の進め方について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容は、分かりやすく配列されていた。</li> <li>・授業の進度はちょうどよかった。</li> <li>・授業の説明は、分かりやすかった。</li> <li>・わたしたちが分かっているかどうかを確認しながら授業を進めた。</li> <li>・考えるときには、時間が十分にあった。</li> <li>・自分の考えや意見を発言する機会があった。</li> <li>・教科書や副教材をうまく使っていた。</li> <li>・黒板の内容は、分かりやすかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配布物は、役に立った。</li> <li>・授業では、コンピュータやビデオなどの情報機器を使った。</li> <li>・聞き取りやすい声だった。</li> <li>・理解しやすい話し方だった。</li> <li>・授業にメリハリがあった。</li> </ul> <p><b>授業の姿勢</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業に熱意や意欲があった。</li> <li>・授業の準備を十分にしていた。</li> <li>・だれにでも公平な授業であった。</li> <li>・自信をもって授業をしていた。</li> <li>・質問には丁寧に答えてくれた。</li> <li>・授業中の私語などに対する注意は適切だった。</li> <li>・授業評価を基に、授業の工夫をしていた。</li> </ul> <p><b>その他</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・提出物の評価は適切だった。</li> <li>・宿題は、学習を深めるのに適切であった。</li> <li>・学習意欲を高めてくれた。</li> </ul>
--	--

英語では「友達と英会話練習を行った」などである。個人では、その特性を生かす評価項目を策定する。例えば、「提出物に適切なコメントを入れて速やかに返却した」など、基本の評価項目に入らないものがある。

授業評価の構成内容は、おおむね、①シラバス、②授業内容、③授業の進め方、④授業の姿勢、⑤その他、に分けられる（表1）。授業の何を評価するのかが明確で、客観性のある評価項目を設定する。また、その評価項目は、児童生徒の実態を踏まえ、児童生徒自身が評価項目について、実現できたかどうか適切に評価できるようなものにしなければならない。そのためには、児童生徒にとって、分かりやすい表現に努めなければならない。また、授業評価票における評価項目数についても、児童生徒の実態を踏まえて決定する。詳細な分析するために、評価項目を増やしても、児童生徒の負担となるばかりである。授業評価票に評価項目を盛り込む手順としては、最初に、学年・教科で共通とする評価項目を設定し、次に、それらに個人独自の評価項目を加える。そして、それぞれの構成内容ごとに、自由記述欄を設定する。この自由記述欄には、主に評価がよくなかった評価項目にかかわっての理由を記入させる。また、「授業内容の難しさは、ちょうどよかった」の項目で、「よくなかった」と答えた場合、難しかったのか、やさしかったのか分からないときの判断ともなる。自由記述を各項目ごとに設けるのは煩雑であり、児童生徒の負担も大きくなり現実的ではない。だからこそ、評価の信頼性を高めるためには、評価項目を絶えず見直すことが望まれる。

授業評価票は教員の授業評価だけでなく、児童生徒自らの学習への取組も自己評価させる。それは、児童生徒により授業をつくろうという意識を主体的にもたせるためである。この評価項目についても、児童生徒の実態を基に作成する。

学級担任制の小学校では、授業評価による学級経営への直接的影響が心配される。評価項目を設定する際には、授業の分かりやすさや授業への意欲を直接問うことはせず、間接的に問うような工夫が望まれる。

回答方法は、4段階評定がよい。授業評価では児童生徒の明確な回答を必要とするので、中間的な回答はさせない方がよい。選択肢の表現は、「とても(4)」「やや(3)」「あまり(2)」「まったく(1)」のように、程度の高い方を高得点とする。それは、結果を直感的に理解しやすいからである。

授業評価票には、記名で答えさせる。一つには、責任をもって回答させるということ、二つ目には、回答に対処すべきことがあった時に、即応できるからである。児童生徒には、授業評価の趣旨を丁寧に説明し、個人の成績などとは関係ないことを十分に理解させなければならない。

そのほかに、高等学校の1年生であるならば、文系や理系などの将来のコース選択、就職や進学といった進路の情報を記入させると、後の分析に役立つ。

#### (イ) D o : 実践

授業はシラバスの内容に基づいた指導と評価の計画に沿って、自らが定めた授業評価項目を意識して行わなければならない。特に、重点評価項目の目標が達成できるように心がけることが大切である。しかし、授業評価を優先する余り、強引な授業の進行は慎まなければならない。例えば、「情報機器を適切に使った。」というような評価項目があり、その目標を達成するために情報機器を使う必然性が無いにもかかわらず、情報機器を使った場合などがそれに当たる。

#### (ウ) C h e c k : 評価

##### a 授業評価票を用いた評価

児童生徒は信頼性ある評価をすることができないとよくいわれる。しかし、授業評価の趣旨やシラバスを丁寧に説明したり、児童生徒の実態を踏まえた授業評価票を作成し評価をさせたり、児童生徒自らに学習への取組を自己評価させたりすることによって、信頼性ある授業評価ができる。先入観をもって、児童生徒には授業評価は無理だと考えることは、授業を行う教員が主体で授業が成り立っているというような思い違いであり、児童生徒の視点を授業に生かそうとする姿勢に欠けているといわざるを得ない。

また、児童生徒による評価の分析をより確かなものにしたたり、授業を専門的に分析したりするためには、他の教員を交えた研究授業を実施することが大切である。中・高等学校では、同じ教科の教員はもちろん、他教科の教員を交えて行う。特別な実習を伴わない限り、授業評価をすることは十分に可能であるし、より広い視野や異なった観点で評価できるので、かえって児童生徒の視点に近づいて評価をすることができる。

児童生徒に授業評価票を用いて評価させる際には、「やや(3)」と「あまり(2)」との中間に安易に○を付けることがないように、評価の仕方をしっかりと説明するとともに、どの項目についても正しく評価させるために、教員が評価項目の内容を一つ一つ読みながら評価をさせていくことが望ましい。また、ある評価項目の回答が欠けてしまわないように、すべての評価項目を漏らさずに回答させる必要がある。それらは授業評価後の統計処理で重要なこととなる。

また、授業評価票を用いた場合のみが授業評価ではないので、日常的に児童生徒から評価項目が達成できているかどうかの情報を収集する必要もある。

最終的な授業の評価は、実際に授業を行った教員でおこなう。それは、児童生徒の評価を自らの授業と照らして分析できるのは、授業を行った教員だけだからである。そのためにも、教員自身が評価項目を自己評価する必要がある。

##### b 統計処理

評価結果のデータは、コンピュータの表計算ソフトに入力して分析を行うと統計的な処理を行

いやすい。まず、各評価項目の平均値を求める。初回の授業評価では、2.5以上のスコアで「おおむね満足」とする（4段階評定の場合）。二回目からは、前回の平均値と比較して分析を行う。厳密には、単純に平均値が上がった下がったではなく、統計的手法（t検定やウェルチの方法）を用いて、前回と差があるのかどうかを検定する必要がある。また、授業評価時に回答した男女やコースなどの属性で平均値を求めて、比較して分析することもできる。また、簡便な方法としては、各評価項目の中央値を求め、それらの値をその評価項目のスコアとすることもできる。

「シラバス」や「授業内容」などの構成内容ごとにスコアの平均をとり、レーダーチャートのグラフを作成することによって、各評価項目間のバランスを見ることも可能である。

更に、「授業内容に興味や関心がもてた」という評価項目が、それ以外の評価項目とどのような相関があるかということ調べるために、相関分析を行う手法がある。欠課時数や児童生徒の自己評価項目との関係を調べることもできる。各種統計方法については、統計学の入門書に譲る。

#### (エ) Action:改善

重点目標とした評価項目が「おおむね満足」の状況にあるのかないのか、「おおむね満足」の状況にない項目は何なのかを点検する。自由記述の意外な意見についても、授業に工夫改善する点がないかどうかを考察するための資料とする。また、平均値が高い評価項目も、前回の評価と比べてどうなのか、残りの否定的な意見は何なのかを十分に考察する必要がある。児童生徒の意見が授業評価のすべてではないので、授業を行った教員が自らの授業を振り返って十分に分析する。更に、自己評価と児童生徒の授業評価とを比較することも可能である。比較してその差が大きい評価項目ほど、自ら気が付きにくい評価項目である。

授業評価の分析は、個人だけではなく、教科、学年及び学校全体として研修会をもって分析する。その分析を基に、教科、学年及び学校、すなわち組織的に授業を工夫改善しようとする姿勢が大切である。

ある評価項目の平均値が低かった場合、何が原因であるかを他の評価項目と関連付けて分析する。「授業の説明は、分かりやすかった」という評価項目の平均値が低い場合、授業内容の構成が悪かったのか、考える時間を十分に与えていなかったのか、それとも話し方や声の大きさに問題があるのか、それらの平均値を確かめたり、それらの相関分析を行うことにより原因が明らかになり、授業の工夫改善の視点が生まれてくる。

具体的な授業改善の方法としては、①教員相互の授業研究、②指導主事などの校内研修への参加、③ティーチング・ポートフォリオ、④研修会やワークショップへの参加、⑤日常の情報交換、などが挙げられる（図6）。

小学校では、学級担任が全教科を教えることが前提となっているので、授業研究も積極的に行われているが、中・高等学校ではあまり行われていない。授業の工夫改善のためには、教科にかかわらず授業研究を行うことも大切である。その際、指導主事や教育にかかわる専門家を授業研究に入れることにより、より質の高い研修が実現できる。

ティーチング・ポートフォリオとは、シラバス・コーズブック（授業に用いる教材一式）・授業における特記事項（興味、つまずき）・授業中に思

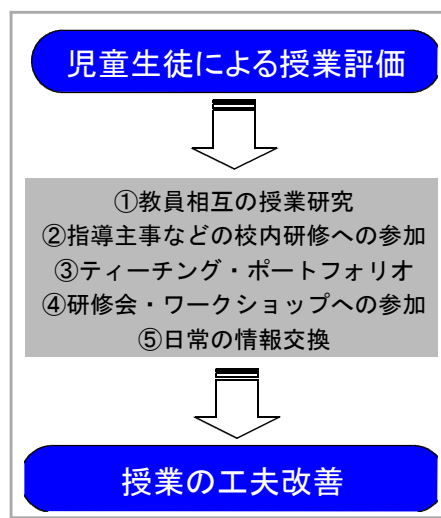


図6 授業の工夫改善の方法

いついた事柄，説明，評価方法及び授業評価にかかわるコメントをポートフォリオにしたものである。それらを基に研修会を開くとよい。民間企業では、高業績者に共通してみられる行動特性のことをコンピテンシーといい、それぞれの職種のコンピテンシーを洗い出して、それらを評価基準とし、社員の行動の質を高めている。教員においても、優れた授業を行う教員のコンピテンシーが存在すると考えられ、学習指導に関して優秀な教員のティーチング・ポートフォリオを基にコンピテンシーについて研修を深め、授業の工夫改善に生かすことができる。

授業評価を踏まえて、研修会やワークショップに参加することも、課題意識をもって参加できるので授業の工夫改善に有効である。また、教科の研修会だけではなく、問題解決の技法や自己表現力を高めるアサーション・トレーニングのワークショップへの参加も有効であろう。

そして、一番大切なことは、いつでも教育にかかわる情報交換や議論ができる学校の風土を築きあげることである。授業で行き詰まったときに気軽に他の教員と相談ができたり、相互に授業を参観したり、ティーム・ティーチングを行ったりできる関係がよい。

児童生徒の授業評価を、このような方法を用いて分析し、授業の工夫改善の方策を見だし、すぐに授業に生かしていくことが大切である。授業評価を行っても、迅速に児童生徒にフィードバックをしなければ、児童生徒の視点を生かした授業の工夫改善の意義を失うこととなる。

## 5 今後の課題

平成15年4月、高知県教育委員会高校教育課は、「まなび21プラン（県立高校学力向上のための5ヵ年計画）」を公表し、「授業評価システムはなぜ定着しなかったのか」という資料をまとめている（表2）。教員の意識が高まらない理由として、「授業観の固定化（楽しい授業への反発）」「必要性を自覚していない」「評価されることへの抵抗感、恐怖」「人間性評価につながる恐れ」「人事考課につながる懸念」「指導案づくりも十分にしていない」「いつも改善に努めているという自負・自尊心・慢心」「生徒の反応をみれば分かるという慢心」「実施する精神的な余裕がない」「時間をもったいない」「実施して報告するだけでよいという意識」という内容が挙げられている。

授業評価を定着させるためには、授業の工夫改善にかかわる学校としての目標を、いかに教員一人一人が自らの意識としてとらえ、学校、学年及び教科としての組織力を高めるかにある。そのためには、「すべての児童生徒がわかる授業を行う」という目標を立て、児童生徒による授業評価を行い、すべての教員で検証するという作業が必要である。更に、先の検証を基に「わかる授業」への工夫改善を仮説として共有し、授業を行い、児童生徒による授業評価を行い、仮説を検証することが大切である。まさに、すべての教員がPDCAサイクルにかかわって、それを確立することが重要となる。それによって、教員一人一人が目指す授業像を明確にでき、自己実現がなされたときに、授業評価が軌道にのるものとする。これには、管理職のリーダーシップが必要であり、授業評価にかかわるリーダーを育成し、授業評価にかかわる組織を確立することが求められる。

- ① 効果への疑念
- ② 周知・理解不足
- ③ 評価方法自体の未発達
- ④ システム化されていない
- ⑤ 教員の意識
- ⑥ 自由意志（教員各自の実施）
- ⑦ 反権力・県民性
- ⑧ 管理職の姿勢

表2 授業評価システムが定着しなかった原因

## 参考・引用文献

- |     |          |                               |     |
|-----|----------|-------------------------------|-----|
| (1) | 奈良県教育委員会 | 奈良県の教育改革に関する「県民5,000人アンケート」調査 | 平14 |
| (2) | 奈良県教育委員会 | 平成15年度間の学校評価及び情報提供の実施状況調査     | 平16 |

- (3) 東京都教育委員会 生徒による授業評価を生かした授業改善を目指して 平16
- (4) 鎌原雅彦他 心理学マニュアル 質問紙法 北大路書房 平4
- (5) 名古屋大学 名古屋大学版ティーチングティップス  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/index.html> 平16
- (6) 高知県教育センター 平成14年度授業評価システム実施アンケートの結果 平15